

## 病虫害の発生概況

### 〔病害の発生概況〕

#### 1. 稲・麦

早い梅雨入り、長雨・低温・低日照及び台風の影響のために、稲では、いもち病と白葉枯病が、沖縄県を除く各県で多発して記録的な被害をこうむった年であった。

育苗期の水稲では、菌類による苗立枯病は、全般に少～並み発生であった。苗いもちは、種子消毒の不徹底などのために、佐賀県・福岡県・熊本県・大分県で多発した。

本田期においては、早期水稲での葉いもちの初発生は、平年より遅く、発生程度も低かった。普通期水稲では、葉いもちの初発生は各県とも平年並みであったが、発生量は多くなると予想されたので、ほとんどの県で注意報が出された。8月～9月はじめになって、穂いもちが大発生し、警報が北部4県と大分県であいついで出される事態となり、発生面積率は、この4県で69～87%に達した。いもち病の適期防除がなされた圃場とそうでない圃場、また品種による発病程度の差が顕著な年でもあった。

昨年まで、ほとんど発生がみられなかった白葉枯病が、今年各県で大発生した。長雨・台風などの影響もあると考えられるが、これほど突然に大発生した原因は、今後、究明される必要がある。

例年多発する紋枯病は、福岡県でやや多発生したほかは、夏期の低温によって発病が抑制されたために、あまり多発生は認められなかった。もみ枯細菌病は、宮崎県の早期水稲の一部で発生した以外は、夏期の低温のため少発生にとどまった。馬鹿苗病も、大分県の一部で認められたほかは、少発生であった。縮葉枯病は、ほとんど発生が認められなかったが、萎縮病が大分県の北部で7月に多発した。

麦類では、一般に病害の発生が少ない年であり、注意報や警報がだされることはなかった。長崎県でうどんこ病が、福岡県でさび病がやや多発生したほか、縮萎縮病が大分・福岡・佐賀の3県でやや多発生した。

#### 2. 野菜・畑作物

ナス科の野菜では、ナスのすずかび病が佐賀県で3月から6月まで多発し、青枯病が大分県で7月から9月にかけて多発した。トマトでは、葉かび病が長崎・熊本両県で多く発生し、うどんこ病とモザイク病が鹿児島県で多発した。また、鹿児島県では、トマトえき病の警報が12月に出示されたが、その後の発生は、平年並みにとどまった。大分県では、夏秋トマトでかいよう病・えき病・灰色かび病が多発した。ピーマンでは、大分県において冷夏長雨のため露地栽培で斑点細菌病が多発し、鹿児島

県では初期防除の遅れからうどんこ病が多発した。

ウリ科野菜では、キュウリのべと病が各県でやや多く発生し、炭そ病が大分県で多発した。冬春キュウリにおいてモザイク病が佐賀県・大分県・鹿児島県で多く発生した。スイカでは多雨による水没のために大分県でえき病が多発した。メロンのべと病が大分県で多く発生したが、その発病程度は軽かった。カボチャの褐斑細菌病やモザイク病が鹿児島県の早熟栽培でやや多発生した。

イチゴでは、例年とおりのうどんこ病が各地で多発生し、1月・7～8月・10月・12月に注意報が出された。効果的なうどんこ病対策の確立が急がれる。イチゴの他の病害では、炭そ病が長崎県の一部でやや多発生して程度であった。

タマネギでは、佐賀県でボトリチス葉枯病が苗代から発生して多発生したため、2月に注意報が出された。ネギのさび病が大分県の秋冬ネギで多く発生した。

アブラナ科野菜では、大分県の夏ダイコンでべと病と軟腐病及び根部異常症が多く発生し、宮崎県の中部の秋冬ダイコンで萎黄病が多発生した。ハクサイのべと病が鹿児島県で多発生した。キャベツでは、菌核病が大分県・鹿児島県の各地で、根こぶ病が大分県で多く発生した。

ジャガイモでは、長崎県で日照不足のために、えき病がやや多発生したので、5月に注意報が出されたが、多発生のまま推移した。ダイズでは、鹿児島・沖縄両県を除く各県で葉焼病がやや多発～多発生した。サツマイモやサトイモでは、特に大発生した病害はなかった。

#### 3. 果樹

6～8月の多雨及び8月・9月の台風のために、多くの果樹で重要病害が比較的多発生した年であった。

まず、カンキツでは、黒点病が沖縄県を除く各県でやや多発～多発生し、熊本県・大分県では8月に注意報が出された。また、かいよう病も、佐賀県・長崎県・沖縄県を除く各県で多発生したため、8月にあいついで注意報が出された。そうか病も熊本県・鹿児島県で多く発生し、熊本県では早生・普通温州とも100%発病した。

ナシでは、大分県で果実に輪紋病が多発生したほか、福岡県でも輪紋病が近年ずっと増加傾向にある。黒斑病が長崎県・熊本県・大分県でやや多い発生であった。モモではせん孔細菌病が鹿児島県で多発生し、また炭そ病が熊本県では例年になく多くの圃場で多発生した。

ブドウでは、各県でべと病が多発生し、特に大分県では8月には注意報が出された。また大分県では枝膨病や晩腐病も多く発生し、鹿児島県では灰色かび病も多発生した。

カキでは炭そ病が多発生して、福岡県・佐賀県・熊本県・鹿児島県で多く、特に福岡県では激発したところも多かった。佐賀県ではブドウうどんこ病が多発生して、8月

下旬にピークとなった。

ビワでは灰斑病が長崎県・鹿児島県で多く、長崎県では褐斑病もやや多発した。

クリでは、実炭そ病が熊本県・大分県でやや多発したが、他の病害の発生は比較的少なかった。キウイフルーツ、熱帯性果樹では、いずれの病害も少〜並発生にとどまった。

#### 4. 茶樹・特用作物

茶樹では、長雨のため炭そ病及びもち病の発生が目立ち、特に炭そ病は鹿児島県・沖縄県を除く各県で多発した。輪斑病も福岡県全域で多発し、その発生は年々増加傾向にある。イグサやサトウキビでは、特に多く発生した病害はなかった。

(九州農業試験場地域基盤研究部)

## 〔害虫発生概況〕

### 1. 稲・麦

水稻：移動性害虫であるウンカ類とコブノメイガは7月上中旬を中心とする大量飛来があり、ウンカ類、コブノメイガとも8月の第一世代までは発生が多く、これに長雨のため防除時期を失うことがかさなって早生品種などで被害が発生した。しかし、トビイロウンカ、コブノメイガとも9月以降の発生はそれほどでなかったところが多い。当初の多飛来のもかかわらず秋期の発生が少ない理由として、トビイロウンカでは捕食性天敵であるカタグロミドリメクラカメムシの多飛来、及び秋期の低温(福岡、佐賀)、9月になって長翅雌率が高かったこと(福岡)、コブノメイガでは病原微生物による死亡虫が多

1993年 稲主要病害虫の発生面積

(単位：ha)

病害虫名	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄
<b>(病害)</b>								
葉いもち	44,400	32,391	11,000	19,700	23,400	12,469	10,309	50
穂いもち	42,900	31,811	14,000	17,300	26,203	24,703	14,706	25
紋枯病	39,900	26,213	10,800	12,900	26,000	23,300	20,563	35
白葉枯病	5,050	9,925	1,000	13,000	4,550	3,963	684	1
もみ枯細菌病	20	1,000	10	300	2,000	4,500	86	—
縞葉枯病	20	368	200	700	1,600	0	1,191	0
萎縮病	1,100	444	1,000	1,100	7,700	2,286	1,758	—
黄萎病	0	0	50	5	—	267	938	—
ごま葉枯病	—	1,371	3,000	350	6,000	1,622	996	150
ばか苗病	920	640	400	170	5,520	1,341	780	2
小粒菌核病	—	1	800	60	730	0	0	—
心枯線虫病	—	0	50	60	6,100	214	318	2
内穎褐変病	—	—	—	—	—	—	10,882	—
<b>(虫害)</b>								
セジロウンカ	43,200	35,477	19,600	42,900	30,800	26,673	31,908	124
トビイロウンカ	18,400	21,944	19,600	27,610	18,800	15,341	23,784	5
ヒメトビウンカ	7,400	3,647	3,000	6,000	3,500	23,393	3,088	3
ツマグロヨコバイ	24,400	9,678	15,000	11,800	19,600	24,784	10,570	138
コブノメイガ	51,700	36,800	18,000	39,000	33,036	26,400	23,976	259
イネツトムシ	—	—	0	600	8,300	449	5,054	0
イネヨトウ	940	368	1,600	200	910	428	220	0
フタオビコヤガ	160	0	100	150	1,520	1,080	150	0
アワヨトウ	1,430	736	10	200	300	214	170	0
ニカメイチュウ第1世代	1,850	0	0	0	350	0	0	0
ニカメイチュウ第2世代	1,850	0	0	0	105	0	0	0
イネミズゾウムシ	12,000	8,000	6,100	5,150	16,000	20,177	9,520	460
イネゾウムシ	2,700	1,840	2,500	200	4,700	898	6,915	2
斑点米カメムシ類	2,720	3,000	7,000	2,100	5,600	8,657	10,148	42
イネクロカメムシ	220	5	50	100	600	214	865	6
スクミリンゴガイ	16,000	6,439	1,999	4,500	2,763	6,127	1,862	74
総作付面積 (258,772)	54,200	36,800	19,600	54,800	33,036	26,300	33,170	866

いこと、台風(鹿児島)による後代発生が減少が挙げられている。沖縄では一、二期作ともウンカ類は少飛来、コブノメイガは一期作では少飛来、二期作では、9月にやや多発生となった。

ヒメトビウンカ、ツマグロヨコバイは九州全域とも、少ないし並みのところが多く被害は問題になっていない。

水稻のカメムシ類は、休耕田の増加で発生が増える傾向にあるが、本年は概して並みの発生となった。9月以降の好天と稲の出穂期がやや長期に及んだため、山間、山麓部の一部(福岡)、早期稲(長崎、佐賀、大分)、普通期稲(宮崎、鹿児島)で被害があった。

イネミズゾウムシは山間地の早期水稻、普通期早植水稻では被害が目立った(福岡、長崎、宮崎、鹿児島)。また、稲の早期化のため発生地域の拡大が認められる(熊本、鹿児島)。沖縄では与那国で新発生が認められ本種が九州、沖縄全域に分布が広がった。

スクミリンゴガイは水路、用水での防除が困難であるため発生地域、発生量の増加傾向が続いている。本年は越冬成員が多かった上、降雨による本田への侵入が容易となって多ないしやや多の発生となった。発生地域の増加も著しい(福岡、佐賀、長崎、熊本、大分)。

表：害虫類は概して少発生であったが、佐賀でコムギのアブラムシ類が多かった。

## 2. 畑作物

ダイズ：ハスモンヨトウはほぼ九州全域とも成虫誘殺量、幼虫発生量、被害とも少なく経過した。コガネムシが佐賀で8月上旬からやや平年より発生が多め、宮崎でアオクサカメムシ類とシロイチモジマダラメイガが9月以降やや多めとなった。ハダニ類、カメムシ類は少発生のところが多かった。

サツマイモ：宮崎、鹿児島で8月以降ナカジロシタバの増加がみられ平年並みないしやや多。鹿児島の実果用サツマイモでトビイロサビヒョウタンゾウムシが新たに発生した。本種はゴボウの害虫として知られておりサツマイモを加害するのは初めてである。沖縄でイモゾウムシが6月から9月に、アリモドキゾウムシは8、9月に成虫誘殺が多くなり、春植え、夏植えともやや多の発生であった。

## 3. 野菜

マメハモグリバエは寄主作物及び発生地域の拡大が続いている。既発生地は長崎、大分、福岡、鹿児島、佐賀に加えて、宮崎、熊本、沖縄で発生を認め九州、沖縄地域の全県に拡大した。寄主作物は花き類、野菜、マメ類の多種類の作物にわたっており、ナス、セルリー、ミニトマト、キュウリ、キャベツなど被害作物が増加している。寄主範囲が広く、作物によって被害に軽重があり防除の不徹底をまねきやすいこと、有効薬剤が少ないこと、また切花、鉢物、及び苗による移動があり、苗導入時の発見が難しいなど防除の難しさが挙げられている。

トマト、ナス、ピーマン：コナジラミ類は冬春トマト、

ナス、夏秋トマトで低い密度ながら広く発生がみられた(福岡、大分、熊本、鹿児島)。佐賀のキュウリでは1992年10月、'93年5、6月にタバココナジラミの発生が多かった。タバココナジラミは、薬剤感受性の低下がみられ、育苗期から発生し、防除が不十分の場合生育初期から多発生となりやすい。トマト、ナス、メロンでも発生が多く、集団育苗によって発生が拡大している(福岡、鹿児島)。

冬春、夏秋果菜類のミナミキイロアザミウマは鹿児島冬春ナスでやや多めの発生であったが、全般的には並みないし少発生であった。沖縄の冬春ピーマンでミナミキイロアザミウマは11月から3月に増加し、やや多めの発生。

鹿児島冬春トマトでトマトサビダニが多発生し、3月には枯死株を生じる被害がみられた。宮崎、大分でも新たにミニトマトで発生し分布地域が拡大している。

キュウリ、メロン、スイカ、カボチャ：アブラムシ類の発生は概して平年並みだが、大分の冬春キュウリで1992年12月、長崎、熊本のメロン、スイカで4月以降、鹿児島抑制、早熟カボチャでは5、9月に好適気象のため多発生した。ミナミキイロアザミウマとハダニ類も少ないし並みの発生のところが多いが、熊本のスイカで4月以降ハダニ類とミナミキイロアザミウマ、鹿児島冬春スイカでカンザワハダニがやや多の発生となった。沖縄ではトウガンでミナミキイロアザミウマは4月以降増加して、やや多の発生。

キャベツ、ハクサイ、ダイコン、レタス：アブラムシ類とコナガは概して平年並みないし少発生であったが、合成ピレスロイドなどに対する薬剤抵抗性のため防除効果が低く、鹿児島冬春ダイコン、キャベツで1992年11月にアブラムシ類とコナガが多発生するなど散発的ながら被害がでている。長崎の1992年冬キャベツで10月に、鹿児島冬春ダイコンでも11月にモンシロチョウがやや多の発生。宮崎でダイコンサルハムシが9月以降の好天で増加し、11月にやや多の発生。

イチゴ：大分でハダニ類、ハスモンヨトウが冬期に多かった。ハダニ類は長崎で1992、'93年とも10月に多かった。

その他の野菜：大分の秋冬ネギでネギアブラムシがやや多。大分、長崎、佐賀のタマネギのネギアザミウマが4月からやや多めの発生であった。

## 4. 果樹

果樹のカメムシ類：カンキツ、カキ、ナシのカメムシ類は越冬量が少なめで、かつその後も九州全域とも冷夏と長雨で少発生となった。主要な増殖場所であるヒノキの毬果は多いところもあったが(福岡、佐賀)、本年は気象条件が優先して少発生にとどまった。沖縄ではカンキツのミナミトゲヘリカメムシが7月に増加し、並みの発生。

カンキツ：ミカンハダニは大分では冬期の防除不十分

のため6月までやや多。福岡、熊本、宮崎では9月以降の好天により一部で多発した。福岡、熊本、鹿児島でゴマダラカミキリの6月の羽化期の飛来が多かった。本種は近年樹勢の低下した園が増え多発傾向にある。熊本でミカンハモグリガがやや多。合成ピレスロイドに対する薬剤抵抗性に加えて、被害が問題になる新植樹が増加しており、防除しにくい。

ナシ：ナシヒメシンクイが福岡でやや多の発生。防除不十分の園で発生が目立つ。

ブドウ：チャノキイロアザミウマは大分のハウス、長崎でやや多。梅雨前に成虫が増加し、長雨で防除適期を失した。

カキ：福岡で慣行防除、無防除を問わず新梢、果実にフジコナカイガラムシの被害がみられ、多発生となった。越冬が多かったことに加えて第1世代幼虫の増加が目立っており、カメムシ類とハマキムシ類の防除剤によるリサージェンスと推測された。ハマキムシ類は8月以降果実に被害がやや多い(福岡)。

モモ：大分ではモモハモグリガの初発生が早くやや多の発生、鹿児島では、前年の台風による落葉が多く、初期密度が低く、7、8月以降増加したが並みの発生にとどまった。

クリ：大分でモモノゴマダラノメイガがやや多の発生。

熱帯果樹：沖縄のパパイヤでオスベッキーマルカイガラムシ、マンゴーでメキシココナカイガラムシ、バンジローでミドリワタカイガラムシが新発生し、特殊報が発令された。

#### 5. 茶 樹

福岡、熊本、鹿児島でチャノホソガ、熊本でチャノミドリヒメヨコバイがやや多の発生。長雨により防除不十分のまま秋期の好天で増加した。カンザワハダニは大分では春に、宮崎では9月以降やや多。福岡、宮崎ではクワシロカイガラムシが数年増加傾向があり本年もやや多の発生であった。

#### 6. 特用作物

サトウキビ：鹿児島島のメイチュウ類、クシコメツキ類、沖縄のアオドウガネ、メイチュウ類は多発生の圃場が一部にみられるが、並みないしやや少の発生であった。フェロモンによる成虫誘殺防除を行なっているクシコメツキ類では沖縄では誘殺数がやや減少した。新害虫であるシロスジオサソウムシが沖縄本島で発生した。

イグサ：イグサシンムシガの第1、2世代幼虫による被害が多く、防除の不徹底ないしは多雨による防除効果の不足(福岡)とされた。

(九州農業試験場地域基盤研究部)